

アナウンサー・金子覚関係資料③

～地域発の『街頭録音』の記録～

メディア研究部 島田匠子

はじめに

本コーナーでは、戦中から戦後にかけてNHKのアナウンサーとしてラジオ放送に携わった金子覚氏の関連資料を2回にわたって紹介してきた。最終回となる今回は、戦後、GHQの指導と監督のもと、人々の多様な声を録音して放送した新たなラジオ番組の1つ、『街頭録音』に関する資料を紹介する。金子氏は当時、熊本中央放送局に勤務しており、現地で制作された『街頭録音』に関する記録が、写真も含め約50点残されていた。

各地で収録された『街頭録音』

『街頭録音』は、戦後の放送民主化の過程で1946年6月に始まったラジオ番組で、GHQでメディア政策などを担当する民間情報教育局(CIE)の指導のもと、番組が制作された。当初は、東京・銀座で収録されることが多かったが、新憲法公布に合わせた「新憲法について」というテーマを契機に、各地で録音が行われるようになり、1946年12月から1947年5月にかけて、大阪、名古屋、仙台、広島、札幌、熊本、松山の各中央放送局で『街頭録音』が制作された。

資料に残されていた写真(右上)は、その一環として1947年3月12日に九州で初めて『街頭録音』が収録された際のものである。収録場所となった熊本市の大洋映画劇場前には「JOGK 街頭録音」の白抜き文字が目立つ懸垂幕が掲

げられ(JOGKはNHK熊本放送局のコールサイン)、広場は5,000人もの大観衆で埋まった。写真には、背広姿の男性や和服の女性に交ざり、男女の学生の姿も見え、『街頭録音』に対する世代を超えた関心の強さがうかがえる。



九州初の『街頭録音』の様子
(1947年3月12日 熊本市)

手探りの中の『街頭録音』

このときの『街頭録音』を担当したのが金子氏だったが、残された手記には、「街頭録音とは何をどうやるのか皆目わからない。電話連絡で内容を聞き、学生時代の試験勉強よろしく新憲法を読み、また、明治憲法との比較、その国民生活への影響など、(略)約80項目に及ぶ質問集を作った」といった記述がみられる。手探りで番組制作を進めざるを得ない中で、原稿用紙8枚にわたって準備された質問集には、「新憲法に拠って民主主義は達成されるか」「国体は変わったと思うか」「男女同権について」など、びっしりと質問項目が書き込まれている。

以下は、そうした質問項目をもとに作成された進行メモの一部である。まず壇上にいる幅広い世代の発言者からさまざまな意見を述べてもらったあと、金子氏が観衆の中へ分け入ってマイクを向けるという流れだった。

初めの内は相手の話をきく

一二・四〇分開始

一、時計はマイクアレンジが持つ

- ・メンバー紹介
- ・アナウンス
- ・台を下りて 新憲法をよんだか→

一、新憲法について国体政体の区別を
四十代の男

主権在民にはおいたわしい

⑧ 国体は変ってゐない

反対者 上る

- ・熊中生

天皇から国民に移ったのに関して貴方
の意見をお伺ひしたい

マイク中へ→



収録当日の進行メモ (1947年3月12日)

しかし、壇上から下りたあと、人々の声を録音するのは容易なことではなかったようである。手記には次のような表現がみられる。

私がマイクを持つ技術員と一緒に群衆の中に入った途端、ワーッと叫び声とも悲鳴ともつかぬ喚声を挙げて大観衆が逃げていく(略) 延々と太いコードを引っ張って群衆に踏まれないように多勢の技術員がY字型のさすまたのようなもので群衆の頭上にコードを支えてマイクと共に走った。

残念ながら音声が残っていないため、どのような放送になったのかはわからないが、番組

制作の苦勞がうかがえる内容である。

CIE 担当官からの講評

手探りの中で実施された街頭録音は、収録終了後に、CIE 担当官だったラルフ・ハンター氏や東京の志村正順アナウンサーらからの講評を受けた。その講評を記した記録も残されており、次のようなアドバイスがみられる。

- ・アナウンサーは常に中立の立場であること
- ・婦人については扱いをやわらかく、またこれは難しいですかなどといわないこと
- ・相手がお客さんであるという事を常に意識せよ
- ・お客を動かさず、アナウンサーが動け
- ・常にユーモアを持ち明るい雰囲気を作れ

これまでマイクに向かって自分の意見を述べたことがなかった人々から、どのように自由で率直な意見を引き出すかといった留意点が細かく記されている。金子氏にとっても、これまでの番組制作とは大きく異なる経験だったと推測される。

おわりに

3回にわたって紹介してきた金子氏の資料は、いずれも放送の音源がほぼ残されていない時代のもので、東京以外の放送局での番組制作の実態がわかる点で貴重なものである。また、番組の内容に加え、制作者がどのような試行錯誤を経て、いかなる思いで番組を制作していたのかが浮かび上がるという点でも大変興味深い。これらの資料を参照することで、戦前から占領期にかけての地域放送局での番組制作の実態の解明が進んでいくことを期待している。

(しまだ しょうこ)